

彫金科

専修科発足の時点では美術工芸科は内部に金工、漆工の区分はあったものの、単一の科であったが、明治二十五年の規則改正後は彫金科、鑄金科（新設）、蒔絵科の三科に区分され、それぞれの専門教育がより充実したものとなった。彫金の最初の教師として採用されたのは加納夏雄と海野勝珉で、この二人の名匠によって彫金の伝統的技法が後進に伝えられることになった。彫金科の実習科目には「工場実習」、「絵画」、「彫金図案」があり、中心となる科目は「工場実習」であった。その教程は「第一回生徒成績物展覧会出品目録稿」（前出）に左記の記載があることよって把握することができる。また、本学には彫金の手本（手板）や生徒の習作が多数保存されているので、『東京芸術大学芸術資料館蔵品目録 金工Ⅱ』参照、それらによって授業内容を具体的に把握することができる。

彫金標本目録

魚子 <small>〔ななこ〕</small> 銅地	一枚
直線 全	一枚
曲線 全	一枚
鶏 全	一枚
石目 全	一枚
雷紋 全	一枚
青海波 全	一枚
波 全	一枚
雲 全	一枚
蓮 全	一枚

松 全	一枚
竹 全	一枚
梅 真鍮地	一枚
鶴 銅地	一枚
宝尺シ 全	一枚
靈芝ニ落松葉 全	一枚
菖蒲 鳥銅地	一枚
鯰 隴銀地	一枚
岩ニ波 真鍮地	一枚
鬼瓦 鉄地	一枚
千鳥 銅地	一枚
蜻蛉ニ蝶 銅地	一枚
猿 全	一枚
鯉 鉄地	一枚
仁王 全	一枚
絲瓜 銅地	一枚
唐子 全	一枚
石目種類 全	一枚
花鳥 銅地	一枚
鳳凰ノ丸 隴銀地	一枚
獅子 真鍮地	一枚
曲玉目貫打出シ法 銅地五枚	一枚
馬 全	五枚
彫金道具	一式

彫金標本説明（標本ノ傍ニアルハ彫刻スルノ道具即チ鑿ナリ）

三年間ヲ以テ彫金ノ法ヲ習得セシムルノ標本ニシテ年別ニ之ヲ説明スレハ左ノ如シ

第一年

魚子 鑿ヲ垂直ニ用ヒ粒紋ヲ整一ニ刻スルノ法ヲ習得セシム

直線 毛彫鑿ヲ用ヒ直線ヲ習得セシム（菊花草參看）

曲線 同鑿ヲ用ヒ曲線ヲ習得セシム（全上）

雞 直曲線兩様ノ刻法ヲ習ヒ終リ各自ノ新按ヲ以テ彫刻セシムルモノナリ

雷紋 平象嵌法ヲ習得セシム（花鳥參看）

片切 片切鑿ヲ用ヒ片切法ヲ習得セシム

象嵌片切 前二様ノ刻法ヲ應用シテ彫刻セシムルモノナリ

青海波 薄肉法ヲ習得セシム（鳳凰麒麟參看）

雲 全（全）

波 全（全）

第二年

石目 1 艶石目 2 千鳥石目 此外石目ノ種類多シト雖モ此三

3 縮緬石目 様ヲ習得シ此刻法ヲ應用セハ鑿

ノ製作ニ依リ他ノ石目ハ自在ニ刻スルヲ得ヘシ（石目參

看）

入立高彫リ法ヲ習得セシム

前刻法ヲ習得シ終リ各自ノ新按ヲ以テ彫刻セシムルモノ

トス而シテ之ヲ應用セハ草木類ノ彫刻ハ自在ナルモノナ

松

蓮 入立高彫リ法ヲ習得セシム

リ

岩ニ波 鑿ヲ以テ裏面ヨリ地板ヲ打出シ薄肉彫刻ヲナスノ法ヲ

習得セシム

千鳥 鳥類ノ彫刻法ヲ示ス

寶尺シ 打出シ法ヲ習得セシム

曲玉 打出シ法ノ順序ヲ示セルモノナリ

馬 全前

第三年

靈芝ニ落松葉 諸金属合金色付法並ニ彫法ヲ習得セシム

菖蒲 色繪法ヲ習得セシム（色繪法ハ地板ヘ浅ク草木等ノ形

状ヲ彫刻シ他ノ金属ヲ嵌入付着セシムルモノナリ）

鯰 彫金ニ於テハ最モ必要ナル上彫リ法ヲ習得セシム

鯉 鱗ノ彫法及ヒ上彫リ法ヲ習得セシム

蝶ニ蜻蛉 虫類ノ上彫リ法ヲ習得セシム

猿 獸類ノ上彫リ法ヲ習得セシム

鬼瓦 彫金ノ古法ヲ習得セシムルモノニシテ鑿ノ勢ヲ示スモ

ノナリ（獅子參看）

執金剛神 全前

なお、初期の彫金科について、清水南山（明治二十九年卒）は次のように述べている。

教室は現在會計課のある邊りに古い二階家があつて階上を漆工科、階下を彫金科が使つてゐて、窓に鐵格子がはめられてゐたから、丁度動物園の檻の中で勉強してゐる様だつた。外から

見て脳病院の様に感じた者もあつたかも知れない。悪戯者が其の鐵格子に兩手を掛けて力一杯ゆすると、家が古いから地震の様にゆれて、二階の者達の中には慌てゝ飛び出す者がゐる。それを面白がつてゐる内に本物の地震が来て、すつかり慌てた事もあつた。教室は疊が敷いてあつて、そこに押木をすえ上級生も下級生も全部一緒に勉強もしたし、又そこで辨當も喰べた。先生方の部屋は直ぐ隣りにあつた。鑄造の吹場は今の建築科のある邊りで楠公の銅像は此處で製作され、又校長室の邊りが丁度原型（當時は木彫で原型を作つた）を取る部屋で楠公の原型も日蓮上人のも此處で作られた。

實技（彫金）の先生には加納夏雄先生、海野勝珉先生、向井勝幸先生と三人居られて、海野先生と向井先生は文字通り朝から晩まで實に御熱心に御指導下さつた。先生御自身の依頼品でもあると、わざ／＼學校へもつて來られて、教室で生徒と共に仕事をされた事も度々であつた。加納先生は一週に二度學校へおいでになつて、常に朱筆を手にして居られては色々口で教へられた。先生が一週に二度しかおいでにならなかつたと云ふのは、丁度其の頃明治天皇の御太刀を宮内省へ行つて謹作中であつた爲と聞いてゐる。學校へおいでになると校庭に咲いてゐるスマシレヤタンポ、等を摘んで來られては手板（參考品）を刻られた。其の様な時良く見てゐると、先生のは下畫に非常に長い時間を要して、一度刀を手にすると極めて短時間に彫り上げられた。「繪を彫らずに肉を彫れ」此れは先生が常に言つて居られた事で、今なほ耳の奥にしみ込んでゐる。

先生が故人となられた後の話であるが、我々が先生の作品の十二枚の片切（口繪の網版二枚〔本書口絵、図119、120参照〕——編者註）は此の内より選出した）を見て賞讀してゐる處へ高村先生が來られて「君達に此の作品の眞價はとても分るものぢやないから、まあ／＼たゞ拜んで居給へ」と云はれた。藤田文藏先生曰く「先生の作品を拜見すると溜飲が下る」と、又今泉雄作先生曰く「あの圖案の素晴らしさは川端玉章先生もとても及ぶまい」と絶讀された言葉は今なほはつきり覺えてゐる。

彫金部の實技は、彫金・日本畫・圖案とあつて、學課は森鷗外先生の解剖學・川崎千虎先生の考古學・岡倉先生の美術史があつた。日本畫科以外の科の日本畫の時間は全部合同で實習したのだが一度こんな事があつた。何うした譯か全員が全く怠けてゐた爲學年末になつてから一人残らず落第だと言ふ事になつて大騒ぎを演じたが、よう／＼の事で臨畫と寫生畫一枚づゝ描いて落第を取消してもらつた。こんな事があつた爲か學年が變ると今度は橋本雅邦先生が來られて懸腕直筆を教へられ、全員空氣は驚く程一變して文字通り一生懸命勉強した。私も繪としての勉強をしたのは此の時だつた。本科四年は丸一年間を卒業製作の爲に當てられてゐて、又其の製作費として各人に四五十圓を學校から給與されてゐた。

私は卒業すると研究科へ入つて加納先生について勉強したが、先生は決して自分の手法を生徒に強ひる様な事はされなかつた。昔の名人の作品を數多く外から借りて來られては、それ等を生徒に摸刻させて其等の内一番各自の氣風に合つた方向へ

各々進ませると云ふ教へ方だつた。これは餘談だが、魚目子卷ななこ（彫金の一部）は緻密な仕事で女子に適するから學校に女子部を増設したら良からうと云ふ意見を持つて居られた。

現在帝室博物館にある先生の作品で、月と雁を鐵板に刻つたものがある。此れを製作される時は實に苦心されて、材料が鐵の爲一本の線を彫るにも、鑿がかけて度々研かなければならなかつた。そこで當時學校に櫻井正次と云ふ刀劍鍛冶が居たので、その人にたのんで良く切れて齒こぼれのしない様な鑿を作つてもらつて、初めて作品を完成する事が出来たとの事だ。

私が研究科へ入つてから約一年半程で先生は病の爲遂に他界されてしまつたが、其の御病床にある時、毎週二度づつ必ず作品を持つて行かぬと非常に御氣嫌（機）が悪かつた事をもつてみて、如何に先生が後輩の指導に御熱心であられたかを充分に知る事が出来ると思ふ。

先生は良くこんな事を言はれた「わしの叱言が續くか、君達の根氣が續くか」と。此の言葉によつて我々は何時も勵まされて居た。又生徒に鏢を彫らせても決して完成させずに、中途で仕事を止めさせた。それは生徒を思つて下さる深い心からの爲であつて、若し完成させてそれを金にでもする様な事があつては、前途ある學生が道を踏みはずす元になると心配されたからであつた。又出席簿を御覽になつてこんなものは不要だと言はれたが、それもその筈、先生は毎週お見得になつて、我々の仕事を一見されれば、なまけてゐたか何うかが直ぐ分る事で、生徒の方もなまける處か朝夕少くとも一時間づゝは必らず餘分に

頑張つて居た。或る日先生が小刀柄こつつかを二本我々に見せて其の優劣を問はれた時、私はAを友人Bはを良いと言つたそこで先生曰く「此の二本は何れも立派な名作で優劣は無い。而し、Aの作者は努力によつて此の作品を生むまでに至つた人であり、Bの方はすぐれた天分によつてこゝまで達した人である。名人は前者と後者が一体となつて初めて生れるものだ。君達は何時もう努力する事を忘れてはならない」と。これを聞いた時、私には非常な勇氣が湧き「努力すればなんとかなる」と言ふ自信を持つた。

休暇になると教室が使へないので、先生は研究科の生徒達を御自宅に呼ばれ、生徒は各自押木を持參して、學校と同じ様に休まずに勉強する事が出来た。

自分を空しくして、ひたすら先生について勉強する事が出来た我々は誠に幸福だつた。

先生の御親切が今もなほ身にしみる。 以上

九月十九日

〔加納夏雄先生の事〕清水亀藏談『東京美術學校校友會誌』

第十九号。昭和十五年十月）

鑄金科

鑄金科の指導教官は岡崎雪声、大島如雲、杉浦瀧次郎らであつた。同科の実習科目には「工場実習」、「造型」、「繪画」、「鑄金図案」、「蠟型」があり、「工場実習」が鑄造の専門技術を教える最重要科目で時間数が最も多かつた。ただし、同科の場合、「造型」、「繪

画」にも割合多くの時間をあてており、そこに鋳物職人ではなく芸術的センスのある鋳金家を育成しようとする方針が窺われる。鋳金教育には特別の設備が必要であるが、明治二十四年ごろまでに本校裏門のあたりに鋳物工場（五十六坪）と仕上工場（七十坪）が作られた。これは本来依嘱銅像の鋳造のために作られた設備であったが、「工場実習」の授業もここで行われたらしい。

「工場実習」の教程に関する資料はやはり「第一回生徒成績物展覧会出品目録稿」である。それを左に掲げるが、この教程で使用されたと考えられる手本用の地板や生徒の習作も多少本学に残っている（『東京芸術大学芸術資料館蔵品目録 金工Ⅱ』参照）。

鑄金標本目録

垂花紋並ニ丸形地紋板	一枚
半肉立浪地板	一枚
薄肉雲紋地板	一枚
全 黄蜀葵地板	一枚
全 松ニ鷹地板	一枚
筒形地紋筆筒	一個
無紋細口花瓶	一個
袋足香炉	一個
青海波模様花瓶	一對
長方形水盤	一個
方形生底花瓶	一個
兔置物	一個
岩上観音置物	一個

鑄金標本説明

三ヶ年間で以テ鑄金ノ法ヲ習得セシムルノ標本ニシテ年別ヲ以テ之ヲ説明スレハ左ノ如シ

第一年

垂花紋並ニ丸形地紋板

初テ鑄造ヲナサシムルノ標本ニシテ先ツ古代模様等ヲ鑄ルノ

法ヲ習得セシム

半肉立浪地板

半肉ヲ以テ模様等ヲ鑄出スルノ法ヲ習得セシム

薄肉雲紋地板

全 黄蜀葵地板

全 松ニ鷹地板

薄肉ヲ以テ模様及草木鳥類等ヲ鑄出スルノ法ヲ習得セシム

右ノ法ヲ習得シタルノ後各自ノ意匠ヲ以テ半肉薄肉等ニ就キ

新作セシム

第二年

筒形地紋筆筒

初メテ器物ヲ作ルノ法ヲ教フルモノニシテ最モ簡易ナル筒形

ヲ作り之レニ模様ヲ鑄出スノ法ヲ習得セシム

無紋細口花瓶

袋足香炉

青海波模様花瓶

既ニ習得シタル模様ヲ付シ円体器物ヲ鑄ルノ法ヲ學ハシム

長方形水盤

方形器物ヲ鑄ルノ法ヲ習得セシム

右ノ法ヲ習得シタル後各自ノ意匠ヲ用テ器物ヲ新作セシム

第三年

方形生底花瓶

兔置物

岩上観音置物

器物動物人物佛像等〔まるがき〕全鑄ノ法ヲ習得セシメ及ヒ此法ヲ應用シ

各自ノ意匠ヲ用テ丸物ヲ新作セシム

鍛 金 科

鍛金科は明治二十八年九月に開設され、囑託教師桜井正次、平田宗幸が指導にあたった。前記の「第一回生徒成績物展覧会出品目録稿」は同科が開設される前に作成されたもので、同科については次の記述があるのみであって、教程は把握できない。

鍛金標本目録

- 無紋銅器 一個
- 唐花彫銅器 一個
- 靈芝鈕鉄香炉 一個
- 鍛金順序 七個
- 鍛金道具 一式

鍛金標本説明

金属ヲ鍛鍊シテ之ヲ打出シ諸種ノ器物ヲ作ルノ順序ヲ示スモノナリ

第一 地金

第二 地金ヲ切りタル処

第三 打始メ法

第四 打出シ法（其一）

第五 同 （其二）

第六 形ヲ取り始ムル処（其一）

第七 同 （其二）

第八 前方法ニ依リ打上ケタルモノニテ素銅色ヲ付ケタルモノナリ

第九 前ニ全シク彫刻ヲ施シ火色ヲ付ケタルモノナリ

第十 前ニ全シク鉄ヲ用キテ新案シ彫刻ヲ施シテ後鑄（せ）ヲ付ケタルモノナリ

ただし、本学芸術資料館所蔵の手板（毛彫、鋤彫、打出等の手本）や器物の手本によって教程の一部を知ることができる。

漆 工 科

岡倉寛三は漆工教育の開始にあたって教師の人選に苦慮した様子である。例えば次のような話も伝わっている。

……東京美術學校に漆工科をおかるゝや、時の學長岡倉寛三氏人を介して泰眞を招かれしも、かたく辭してつかず、余は一箇の蒔繪師のみ、いかでか人に授くる才學あらん、又これを教ふる術を知らず、さりながら余の業を職として學ばんとする者は余が工場に入るを拒まずと。岡倉氏これをきよてしふる事